
桜の島ととある超越の拒絶城塞（ライフレス）

偽りのクラウン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の島とある超越ライフレスの拒絶城塞

【Nコード】

N25380

【作者名】

偽りのクラウン

【あらすじ】

学園都市が生み出した影、「超越能力者」。

彼らが目指す夢とは……。初音島を舞台とした能力者の物語です。

はじめに(前書き)

どうも。受験勉強で更新ができない偽りのクラウンです。
サイトを放置して何やっているんだと思うかもしれませんが、ちょ
っとした息抜きです。

はじめに

僕のサイト 桜花と共に歩む道 (<http://m-pe.tv/u/page.php?uid=painumi&amid=1&appid=on>) で公開していた2つの小説の内のサブ小説です。本サイトはただいま更新低迷中です。レベル5とは違う世界を生きる超越者。昔の友人たちとの再会は彼の傷ついた心にどう響くのか。

学園都市ではなく、桜が一年中咲き誇る島「初音島」を舞台にする能力者たちの物語。ぜひお楽しみください。

はじめに(後書き)

これからよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

この小説は本サイトよりも若干手を加えています。
ぐだぐだ展開上等！！な人は見てください

プロローグ

記憶にあるのは、過去の思い出。

桜が舞い散る、幸せな記憶。

「……一心同体？」

「そう、ボクと音姫は一心同体だ。」

ああ、なんてきれいなんだろう。

「こつらんお兄ちゃん、大好きー！」

「はは、由夢。ありがとう。」

ああ、なんてきれいなんだろう。

「楓、君のお母さんを呼んだのはボクなんだ。」

「皇嵐なんて死んじゃえ!!!」

こんな思い出も可愛く思える。

「……これ以上楓を刺激したく無いから、ボクは引越すよ。」

「……帰ってこいよ。」

「ああ、もちろんだ。大親友。」

悪い、義之、稟。約束やぶるわ。
帰れない、帰りたくない。

「学園都市？」

「ああ、君は原石という超能力者の素質があるんだ。」

・・・このとき、俺の人生は狂った。

「・・・」ザシユ。

俺は見たくもない裏をみた。
入りたくもない裏に入った。
極めたくもない裏を極めた。

あの日々から、もう5年・・・。
俺は変わった。彼らの知ってるボクは・・・もういない。

暗い部屋に青年と男が1人ずつ。

「統括理事長直属の超越能力者（レベル5・5）、華后かこう 皇嵐こうらん。仕事だ。」

「へー、出張？何処にいくのさ？」

「能力者育成学校、風見学園だ。」

「！？まったく、アレイスターも悪趣味さ。んで、なんでさ？」

「交換学生としてだ。」

「へえ、それはまた。まったく、当麻や美琴、一方通行に言っておかないとさ。」

「……んで、建前は分かった。本音はどつなのさ？」

「……あそこは我らの言うことを聞かない。」

「なるほど、抑止力としてね。わかったさ、明日には出る。」

学園都市の闇が生んだ天災。

「ライフレス拒絶城塞」が生み出す物語。

桜の島とある超越のライフレス拒絶城塞
始まります。

プロローグ（後書き）

なんだかとっても暗黒な雰囲気が始まりました。
実際はライトな話と病んでいる話を折り交えています。

主人公設定（前書き）

本サイトから言われてきたややこしい設定です。
本サイトからの付けたしがたっぷりです。

主人公設定

名前：華后かこう 皇嵐こうらん

容姿：灰色の髪の毛に白いメッシュを入れてる。イメージは髪の色だけ変えた灰男の「ラビ」。

見た目は樹以上。

性格：幼少時は優しくいつも笑顔を絶やさなかった。

しかし裏に入ってから虚偽の仮面を絶やさず、精神が不安定になることもしばしば。

友人にだけは本心（正確には昔と同じ心）で接することができる。

裏が絡むと冷酷非道になる。

なお、根っからの女好き。

備考：朝倉家、義之、小恋、稟、楓、桜と幼なじみ。

統括理事長直属。表向きは風紀委員長。

超越能力者。

なお、裏にいる割には友達が多い。

フラグ魔だが、鈍感ではなくむしろ自覚している。

だが、自分で意識をしてフラグを立てることは出来ない。

そのためナンパは失敗の方が多いww

好きなもの：友人、ナンパ、ハンバーガー、かなわない夢、魔術

嫌いなもの：自分以外が発する嘘、死、自分、魔法

能力：「拒絶城塞」ライフレス レベル5・5

概要：万物を拒絶するオーラのようなもの操る技。

形、強度を自在に変えられるがさわった瞬間に拒絶するから強度は意味無い。

基本的には薄い板状にするのが戦いかた。

また、オーラなど無くても拒絶は出来る。

主人公設定（後書き）

誰か主人公書いてくれないかな？とか思ってる作者でした。

えっ？お前が描けって？

H A H A H A H A ! ! 絵心が無い私にそこまで求めてもむだむだむ

(r y

全体設定（前書き）

超越能力と世界観について説明させていただきます。

全体設定

超越能力

・絶対能力、つまり神の境地に達するのを目指す他の能力者とは違うアプローチをかける能力者。人は神を越すほどの能力を秘めているのではないか？というテーマから始まった特別な研究から生まれた能力。そのメンバーは5人でその強度順に5・1〜5・5まで分けられている。

また、能力名とは別に各能力にはテーマが付けられている。

5・1 幻影を纏う悪鬼

5・2 夢に生きる焔

5・3 世界を導く指揮者

5・4 虚空を切り裂く剣豪

5・5 君臨せし起源神

これが各能力者の能力のヒントにもなります。

なお、超越能力は完全能力を目指すだけで基本は普通の能力者です。

世界観

魔界・神界は初音島と協力している。そこで魔法が知られる。だが、

魔術はまだ知られてはいない。
また、多重能力は初音島では普通である。

全体設定（後書き）

さて、いろいろぶつとんだ設定をぶち込んでみました。

次はたぶん本編です

始まりのロンド(前書き)

やっと本編。

もう疲れたよ、パトラッシュ。

始まりのロンド

桜が一年中咲く不思議な島。

その名は初音島。

そこは学園都市と同じように能力開発をしている。

基本的システムはつながっており、風紀委員にいたっては、初音島には副委員長、学園都市には委員長がいる。さらに通信で合同会議をしてお互いが直面している問題についての意見交換をしているほど。その意見交換で解決した事件もある。

しかし初音島では、学園都市とは違った方法で能力開発を行っている。

学園都市とは違い、能力開発よりも能力を持った人々が普通に過ごすことを目的にしており、そこでは超能力者だろうが無能力者だろうが関係無い。

初音島は能力自体には興味があるが、それが辿り着く所には興味が無い。

あくまでレベルはオプションなのだ。

今回の任務は初音島の風見学園に交換学生として無期限出張。

魔王候補土見稟の観察、なお公にはなっていない君の婚約者神界王女リシアサンスもついでに護衛。

そして、芳乃さくらへの牽制。昔からの知り合いである君を見たこと

きの彼女の驚いた顔を写メで送ること。

健闘を祈る アレイスター・クロウリー

「……はあ、アレイスターはふざけすぎさ。最後の項目なんかシリアスな空気を完璧に壊したさ……」

ここは初音島に向かう飛行機の中、皇嵐はアレイスターから任務前にもらった手紙をみてため息をしていた。

「……というかあいつ、誰が交換学生として行くのか言っていないさ、絶対……。」

さくらさんに絶対なにか言われるさあ、どっしりお尻

「皇嵐お母……」

皇嵐が愚痴をこぼしていると通信がかかってきた。

「なにさ？通信係？」

相手の名前は通信係。

皇嵐は学園長からVIP扱いを受けているのでどんなお偉いさんでも通信係を通さないと会話をすることができないのだ。

「誰かから通信がきたのか？」

「いえ、そういったわけではありません」

「んじゃ、なにさあ？」

「クローリー様から、あなたが初音島に着く5分前に伝えるように言われている伝言があったのでそれを伝えよう……」

「伝言？」

アレイスターは基本的に皇嵐に直接通信することが出来る唯一の人物だ。

そのアレイスターが直接では無く通信係を通して、しかも自分では無く通信係に伝言を伝えるように言うなんて初めてのことだった。

「はい、そのまま読みますね。」

あ、伝え忘れていたが先方の芳乃さくらにはこれから送るのは初音島への牽制だと言っておいた。そして、他の教員には学園都市の中でも最高の人材を送ったと伝えている。
レベルを偽る必要は無い。では再び言わせてもらおう。 健闘を祈る。

だそうです。

それでは私はここで失礼します」

「……………アレイスター、後で消す」

あいつ。俺が無駄にさくらさんに警戒されんじゃねーかよ。
つか、番外位の最高を偽らないのはいろいろとまずいんじゃない？

学園都市最強は一方通行だ。だが、最高は皇嵐だ。

レベル5番外位「五角形」^{ペントラゴン}最高のレベル5・5を所持している皇嵐。「五角形」とはレベル5とは比べることが出来ない5人の能力者。目指す物が違うのだから。

レベル5は絶対能力を目指す。そして、「五角形」は完全能力を目指す。

絶対的な神ではなく、神を超える可能性を持つ人の終着点“完全な人間”。

それが「五角形」の目指す物だ。

そして、五角形にもレベルの差がある。

5・1が最下位、そして5・5が最高位。

神を凌駕する物を目指す番外位にとってその番号は圧倒的な差を表していた。

唯一0・1単位で動くレベル。そして、6・0と言うのではない。

5・9の次は6・1。それを目指すのが番外位なのだ。

「……確かに番外位のことには公になっているけど、流石に全校生徒に番外位って知られるのはちょっと複雑さあ〜」

しかし、こうなったらもうどうにも出来ない。

腹をくくることを決めた。

「もつすぐ到着です」

運転士が俺に言ってくる。

「……さて、久しぶりの故郷、せいぜい楽しむとしますよ」

本当は帰りたくなかったけどな……。

本音を隠しながらも学園都市最高位“ライフレス拒絶城塞”が桜の島に降り立った。

「やっぱり5年もありゃ、けっこう変わるもんさ」

かなり変わった初音島の町並みを見ながら歩いている皇嵐。あと30分近く余裕があるので、町並みを見ることにした。

「ま、俺の口調も変わったけどさあ〜」

そう、皇風のこの変な口調もこの5年で出来た物。
5年という短いようで長い時間をかみしめる皇風。

「おいおい、嬢ちゃん？金持ってないか？」

「？不良か……？」

見てみると二人の不良が1人の女の子に絡んでいるのが見えた。

「ぶつかった拍子に骨折れちまったじゃねーかよ。弁償してくれねーか？」

「あ、あんた達みたいなのに払う金なんてないのですよ……」

へえ、気が強いオッドアイの女の子か……。

「はあ、めんどくさいけど立場的に助けなきゃさあ……………」

そういつて鞆の中から腕章を取り出す。

「なんだと!?!この女、調子にのるな!」

そう言うと男が女を殴ろうとしている。

「はあ、めんどく……………」

俺はそう言うと男の腕をつかんだ。

「風紀委員だ。ここで謝るか、殲滅されるのか、どちらか選べ」

「な!?!」

「風紀委員!?!まだ見回り時間じゃないはず!?!」

お、動揺してる。

ま、とりあえず……。

「おめ、おっおと選入」

そう言つと俺は相手の腕をひねる。

「ぐあああああああ!?!は、はなしやがれ!?!」

「どっちかと聞いている」

「!?!……逃げろ!?!」

「でもよ!？」

「相手がわりい。風紀委員相手は流石に分が悪い、逃げるぞ」

「賢明な判断さあ」

俺はそう言つと手を離す。

「馬鹿鹿!!死ね!!」

男はそう言つと手から炎を放つた。

「風紀委員さん!？」

女の子が焦つた声で俺を呼ぶ。

あつちからは爆風で見ることが出来ないのだろう。

「ひやははは。俺は発火能力レベル3。邪魔してくれたんだ、燃えちまえな!!」

「お、おい。逃げなくて良かったのか!？」

「いいんだよ。ほら、みる。もうあいつは立てないはずだ。それより金よこせよ」

「きゃっ!!」

……残念。

俺の能力は俺に危険があるものには俺の演算能力を自動的に使って反応するようになってる。
だから、やられてるわけがない。

だが、目の前の馬鹿はもう片方の意見も無視してはしゃいで、女の

子から金を取ろうと手を取る。

さて、そろそろ制圧しますか。

俺は体術の一つ、瞬動で一気に馬鹿に近づくと、

「ぶつとぶね」

その勢いのまま、馬鹿の顎を拳で打ち抜いた。

「ぐがつ！……！！……！！……！！……！！」

うん、感触的に骨が逝ったか。
ご愁傷様さ

「ひっ！……」

もう片方が逃げようとする。

「忘れもんさあ〜」

俺は馬鹿を持ち上げるともう片方に投げてやった。
俺って親切〜

「ひ、ひい〜〜〜〜!!」

もう片方は馬鹿を担ぐと全速力で走り出した。

「ふう、疲れたさあ……」

「あ、あの」

俺が一息ついていると女の子が声をかけてきた。

「あ、ありがとうございます。おかげで助かったですよ」

「いやいや、オッドアイがきれいな可愛い女の子を狙う馬鹿を成敗しただけさあ」

「……！オッドアイがきれい？本当ですか？」

「？本当もなにも自覚してなかったんさあ？俺好みの可愛い女の子さあ」

「……／／あ、ありがとう……」

……？やば、フラグ立ったか。

俺は天然誑しってやつなのだが、なんと自覚はあるのだ。

だけど、自覚はあっても天然なので直らない。困った特性だ。

しかも、フラグを折ろうと努力するほどフラグが強化されていくのだ。

そして、俺の結論。

めんどくさいから放置。立ったら立っただ。神界は一夫多妻、シア

と結婚すればいいのだよ。

……まあ、それまで生きてるか知らないけど。

「あ、あの。名前は？」

「それより学校遅れない？」

「え……。って、ああ！！もうこんな時間！！」

「いまから急げば間に合うよ」

「は、はい！！」

そう言つと女の子は走り去っていった。

「さて、俺も行くとしますか」

俺はそう言つと腰のベルトにつけた変な形の剣を取り出した。

剣と呼ぶのも可笑しいかもしれない。
持ち手まででは一般的な日本刀のだが刀身が異常に短い。
ナイフ並なのだ。

「白銀、抜刀……さあ」

そういつと刃をふる。
すると空間を短刀が切り裂いた。

「はは、やっぱりこれやる時はこう言わないとさあ」

皇嵐はアニメ好きでもある。
自分の能力の万能性から、よくアニメ技をばくってそれが意外に使えるというパターンもしばしばある。

「さうて、いくさあ！」

皇嵐はそう言つと自分が作った空間の裂け目の中に入っていった。

「……遅いなあ」

芳乃さくらは人を待っていた。

今日来る交換学生。高いランクという噂もあるからわくわくする気持ちもある。

だけど、それよりもボクは怖い。今回来るのは学園都市の観察者でもあるのだ。

ここは、国でも珍しい神族・魔族もすんでいる島。

神族・魔族の子もいっぱいいる。もちろん、人族は言うまでもなく多い。

そのみんながもしかしたら学園都市の裏に巻き込まれるかもしれない。

ここは学園の裏から切り離された場所。もし、そんなことがあったら……。

芳乃さくらが一つの覚悟をしようとしていると、

ズガッ!!

空間が割れた。

「あれ、ここでよかったさあ？」

そして、中から現れたのは、

「……嘘？」

さくらが驚愕するには、

「お、写メ撮る」

十分な人だった。

「……皇嵐……くん？」

「送信つと。あ、さくらさん。お久しぶりです」

「……なんで？」

「なにがつすか？」

「なんで、君がこんなところにいるの！？まさか交換学生って！？」

「ああ、それ。それって俺さあ」

「！？アレイスタああああああああああああああああああ！！」

あんたは！？どうして！？ボクの大事なものを！？裏に巻き込むの
！？

ボクたちが学園都市の言うことを聞かないから！？だからって！？

「さくらさん？どうしたんさあ？」

「……皇嵐くん。君が学園都市の観察係？」

「う、あいつ。冗談かとおもったら本当に言っただが……」

「……そう言う反応ってことは、本当なんだね」

アレイスタああああああああ！おまえは！おまえはあああああああ！

さくらは表向きは冷静にしているが、内面はアレイスターへの怨嗟で一杯だった。

ボクは！！彼の両親が死ぬ前に奇跡的に意識を取り戻した時に！！
「さくらさんに皇嵐を任せます」と言われながら！！皇嵐くんを！！
！守れなかった！！

さくらは皇嵐の両親に皇嵐を任せられながらも皇嵐を守れなかったことを悔やむしかなかった。

「……？さくらさん？本当に大丈夫さあ？」

「……うん、大丈夫。それより、なんで裏の世界に入ったの？」

「いや、どうでもいい理由ですよ」

「いいから……！」

つい大声出しちゃった。

皇風くんもビツクリしているみたいだ。

「……どうやら、真面目にしなくちゃいけないみたいさあ。」

「ごめん。けど、教えて？これは大事なことなんだ。」

「………誓いです。」

「誓い？」

どういうこと？あの優しかった皇風くんが裏に入ると決意するほどの誓い。

「最初は入りたくなかったさあ。けど、俺は殺しを強要された。殺さなきゃ、楓や音姫を殺すって言われて仕方なく殺したんさあ」

「……やっぱり脅しか……！」

アレイスター！おまえだけは！貴様だけは……！絶対許さない……！！

「……でも」

「？」

何か他にあるの？

「その後理解した。この世の中では、守りたい物は力が無いと壊れていくって」

「……………？どっいっしょと？」

「ここから先は、いくらさくらさんでも言う訳にはいかないさあ。俺の誓いの理由を知っているのは我が心友アレイスター・クロウリーだけで十分さあ」

「皇嵐くん！！」

「……………。俺の誓いは二つ、あの時守れなかったものが戻ってくるまで守りきれぬ強さを。そして、他の大切な物も纏めて守る力を……………！」

「皇嵐くん……………」

「だから俺は、取引をした。俺はあいつの力になる。あいつは俺の力を増やす。相互利益がきっかけの関係。だが、それでも今の俺らは「心の友」、心友だ」

「……分かった。今は何も聞かない方がいいんだね」

「……助かるさあ。さくらさん」

「いいよ！今までののはボクのキャラじゃなかったね！」

「そうそう、さくらさんはそうじゃなまきさあ！」

「さて、そろそろ君の担任がくるよ」

コンコン。

「ナイスタイミングさあ！」

「入っていいよ、紅薔薇ちゃん！」

「失礼します」

そう言って入ってきた人はまるでモデルのような女性だった。

「……さくらさん、本当にこの人教師さあ？」

「うん。そうだよ」

「マジっすか？」

「まじマジ」

「……まじか」

いつのまにかさっきまでのシリアスな空気は消えて、コメディーな感じになっていた。

「とりあえず自己紹介しておこう。紅薔薇撫子だ。紅女史と呼ばれている。専行は念動力だ」

「あ、俺は華后皇嵐です。レベルは5番外位「ペントラゴン五角形」の「ライフ拒絶城レス」

塞」。よろしく願いします、紅女史」

俺が自己紹介をすると二人ともすごく面白い顔になった。

「……？どうしたんさあ？」

「おまえがあライフレスの「拒絶城塞」。学園都市最高の超越能力者（50ver）の頂点、5・5」

「そうだったんだ、皇嵐くんが……」

「あれ？さくらさんにはアレイスターから話しが通ってたんじゃ？」

「いや、誰かも分からなかったくらいだし、すごく高ランクがくるってことしか……」

「私はてっきり一方通行がくるのかと思っていたくらいだが……」

「まさかそれよりすごい人がくるなんてね」

さくらさん、そんなあっさり……。

「ま、とりあえず教室に行くぞ、かつきー」

「かつきー？」

「華后だからかつきーだ」

「あ、ニックネームさあ……」

なるほど、ニックネームだなんてこれまた珍しい先生さあ。

「さくらさん、さくらさん、さくらさん、さくらさん、さくらさん」

「うん、わかった」

俺はさくらさんに別れを告げると教室に向かった。

始まりのロンド 終幕

始まりのロンド（後書き）

長かった。

今度から更新は不定期になります。

また次の更新で会いましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2538o/>

桜の島ととある超越の拒絶城塞（ライフレス）

2010年10月11日16時49分発行